

憬興『無量寿経連義述文賛』に引用される 『無量寿経論』

辻本 俊郎

- 一、はじめに
- 二、憬興とその著作について
- 三、憬興の見た『無量寿経』
- 四、『無量寿経連義述文賛』に引用される『無量寿経論』
- 五、結論

キーワード：憬興、『無量寿経連義述文賛』、
『無量寿経』、『無量寿経論』

一、はじめに

西暦六、七世紀の唐代では、曇鸞、慧遠、道綽、迦才、善導などが活躍した頃、韓半島の新羅においても多くの註釈家たちが活躍をした。すなわち、元暁、法位、玄一、義寂、そして、ここで取り上げようとする憬興⁽¹⁾である。彼らの著作は日本の諸師によってその多くを引用されたことから日本の浄土教に影響を与えたこと

は言を俟たない。ただし、彼らの著作のほとんどが散逸してしまっており、新羅浄土思想を伝える完本として現存しているのは元暁偽撰『遊心安楽道』⁽²⁾、元暁『阿弥陀経疏』⁽³⁾、憬興『無量寿経連義述文賛』のみであって、また、玄一『無量寿経記』が上巻のみ現存し、その他は恵谷隆戒〔一九七六〕によって法位『無量寿経義疏』、義寂『無量寿経述義記』の一部が復元されているにすぎないのである。

新羅浄土思想の特色に関しては、恵谷隆戒〔一九七六〕が『観無量寿経』を中心とする中国浄土教に対して、『無量寿経』を中心とする浄土思想であるとしている。これに対して章〔一九九二〕は、信仰面においては『観無量寿経』の十六観が重視され、実際に行われていたのであるから、『観無量寿経』の研究が軽視されていたとは考えにくい、としている。

(1) 高麗の一然（一二〇六～一二八九）撰『三国遺事』卷五「憬興過聖」の条によると、神文王代。大徳憬興。姓水氏。熊川州人也。年十八出家。遊刀三藏。望重一時。開耀元年。文武王将昇遐。顧命於神文曰。憬興法師可爲国師。不忘朕命。神文即位。曲爲国老。住三郎寺（『大正新脩大藏經四九卷一〇一二下』）。とあり、姓は水氏、熊川の人であり、十八歳で出家したとある。また、開耀元年、すなわち、西暦六八一年に文武王（在位六六一年～六八〇年）が死に臨んで神文王（在位六八一年～六九一年）を顧みて「憬興法師は国師となるべき人である」と命じて言った、とあり、これによって彼が活躍した年代、すなわち、七世紀後半であると推定されよう。韓〔一九九一〕では憬

興の生誕年を西暦六二〇年から六三〇年ころと推測。没年を七〇〇年頃と推測。渡辺〔一九七八〕は、西暦六二〇年から七〇〇年までを生存年代とする。

(2) 『遊心安楽道』の著者には主に次の5説がある。

①源 弘之〔一九七三〕新羅撰述説、②落合俊典〔一九八〇〕〔一九八八〕〔一九八九〕十世紀半ば、叡山僧撰述説、③章 輝玉〔一九八五〕〔一九九二〕八世紀半ば、弘法寺系新羅僧撰述説、④韓 普光〔一九九一〕八世紀半ば、新羅僧撰述説、⑤愛宕邦康〔二〇〇六〕八世紀、東大寺華嚴宗僧智憬撰述説。辻本〔二〇〇七〕によれば、元暁撰述説は全く承認しがたい。また、叡山僧撰述説については現段階でいえば、避けられるべきではないとする。

(3) 辻本〔二〇〇九〕参照。

いずれにせよ、新羅浄土思想は、元曉、義寂、玄一などの浄影寺慧遠系統と憬興などの唯識系統の2系統がある。その中で、章〔一九九二〕は六、七世紀に中国で盛行していた諸宗の教学が新羅に伝えられることによって、当時の諸師はおおむね先進国の文物を摂取しようという意図で浄土経典を注釈したのではなかろうか、と推測する。この中で本小論において採り上げる

のは唯識系統の憬興『無量寿経連義述文賛』⁽⁴⁾の中に引用される世親『無量寿経論』に関して一考察を加えることにする。

二、憬興とその著作について

さて、ここで諸経録に記載されている憬興の著作について一覧表にまとめてみた⁽⁵⁾。

	法相宗章疏 東大寺平祚大法師撰	注進法相宗章 疏蔵俊撰	東域伝燈目錄 興福寺沙門永超集	新編諸宗教蔵総録 高麗沙門義天
涅槃経疏	○			○
最勝王経略賛	○	○	○	
十二門陀羅尼経疏	○		○	
弥勒上生経疏	○			
顕揚論疏	○	○	○	
唯識貶量	○	○	○	○
瑜伽論疏	○			○
金剛般若経料簡		○		
無量寿経疏		○	○	
三弥勒経賛		○		
涅槃経述賛		○	○	
成唯識論記		○		
大因明論義抄		○	○	
大乘法苑義林章記		○	○	
大般若経綱要			○	
般若経疏			○	
法華経疏			○	○
大集経疏			○	
阿弥陀経略記			○	
弥勒経疏			○	
弥勒経述賛			○	○
灌頂経疏			○	
解深密経			○	
金鼓経疏			○	
瑜伽論釈論記			○	
顕唯識論記			○	
法鏡論			○	
金光明経述賛				○
金光明経略意				○
弥勒経逐義述文				○
薬師経疏				○
四分律羯磨記				○
大乘起信論問答				○
俱舍論鈔				○

(4) 韓〔一九九一〕では現存本は三巻であるが、初めは二巻本であったと推測している。また、この書は、親鸞が重用した註釈書としてよく知られている。

(5) この一覧表の作成については特に渡辺〔一九七八〕、韓〔一九九一〕を参照した。

この表により

- ① 多数の唯識、弥勒関係の書物に対して註釈を施している、
- ② 小論のテーマと関わる浄土教に関する註釈は『無量寿経疏』『阿弥陀経略記』のわずかに二書にすぎない、
- ③ すべての経録に一致して挙げられているものは『唯識貶量』のみであって、その他は異同の激しいことが容易に理解できる。

の3点を指摘することができよう。

三、憬興の見た『無量寿経』

藤田宏達〔二〇〇七〕によれば、『無量寿経』は、「漢訳としてすぐれ文意が明瞭であること、一句四言でリズムの美しさを代表する文体であること、本願文なканずく第十八願文が明確な形で念仏往生の思想を表明していること、『観無量寿経』の所説と対応する点があること、主要な註釈家や浄土教家たちがすべてこの訳本に準拠した」点などをあげて『無量寿経』が「浄土三部経」の中で最も重要視される理由を述べている。

また、『無量寿経』の訳者についてであるが、伝統説では康僧鎧となっているが、梁・僧祐（四四五～五一八）『出三蔵記集』を始め、『法経録』、『仁寿録』、『静泰録』には触れられておらず、さらに、梁・慧皎（四九七～五五四）『高僧伝』にも甚だ簡略に記されているのであって、現在、学者の中では伝統説を採る研究者はいない。現在の学界の定説では、四二一年に仏陀跋陀羅・宝雲共訳説が最も支持される説とされている。

さて、ここで憬興『無量寿経連義述文賛』に

おける『無量寿経』に関して渡辺〔一九七八〕は伝康僧鎧訳ではなく、竺法護訳である⁽⁶⁾とし、また、金〔二〇一〇〕は憬興が参照した『無量寿経』は伝康僧鎧訳では決してあり得ないとするのである。果してそうであろうか。そこで憬興『無量寿経連義述文賛』に引用された『無量寿経』と伝康僧鎧訳『無量寿経』について字句の異同があった箇所を一瞥しておくために比較対照する（上段が憬興『無量寿経連義述文賛』、下段が伝康僧鎧訳『無量寿経』である）。

- ① 幻化之法（大正新脩大蔵経三七卷一四四上）
幻法（大正新脩大蔵経一二卷二六六中）
- ② 爲重擔（大正新脩大蔵経三七卷一四五下）
爲之重任（大正新脩大蔵経一二卷二六六中）
- ③ 奇特之法（大正新脩大蔵経三七卷一四六中）
奇特法（大正新脩大蔵経一二卷二六六下）
- ④ 今日世雄住諸佛所住（大正新脩大蔵経三七卷一四六中）
今日世雄住佛所住（大正新脩大蔵経一二卷二六六下）
- ⑤ 去來現佛（大正新脩大蔵経三七卷一四六下）
去來現在佛（大正新脩大蔵経一二卷二六六下）
- ⑥ 如來顔容超世無倫（大正新脩大蔵経三七卷一四八下）
如來容顔超世無倫（大正新脩大蔵経一二卷二六七上）
- ⑦ 窮其涯底（大正新脩大蔵経三七卷一四八下）
究其崖底（大正新脩大蔵経一二卷二六七中）
- ⑧ 以偈頌曰（大正新脩大蔵経三七卷一五三中）
而説頌曰（大正新脩大蔵経一二卷二六九中）
- ⑨ 一切隱不現（大正新脩大蔵経三七卷一五三下）
天光穩不現（大正新脩大蔵経一二卷二六九

〔6〕渡辺顕正〔一九七八〕は、「今西晋法護名無量壽經。故經之名雖復廣略其義大同。欲釋法護經本之名即有四對」（大正新脩大蔵経三七卷一三一下～一三二上）や「今法護經略舉比丘菩薩二衆餘皆無也」（大正新脩大蔵

経三七卷一三二下）の記載から憬興『無量寿経連義述文賛』に引用される『無量寿経』が、竺法護訳の『無量寿経』であるとする。

中～下)

- ⑩ 通達靡不照 (大正新脩大藏經三七卷一五三下)
通達靡不遍 (大正新脩大藏經一二卷二六九下)
- ⑪ 阿難時彼 (大正新脩大藏經三七卷一五三下)
阿難法藏 (大正新脩大藏經一二卷二六九下)
- ⑫ 香味觸法 (大正新脩大藏經三七卷一五四上)
香味觸之法 (大正新脩大藏經一二卷二六九下)
- ⑬ 名曰安樂 (大正新脩大藏經三七卷一五七上)
名曰極樂 (大正新脩大藏經一二卷二七一中)
- ⑭ 涅槃之道 (大正新脩大藏經三七卷一五七上)
泥洹之道 (大正新脩大藏經一二卷二七一下)
- ⑮ 佛告阿難 (大正新脩大藏經三七卷一五九中)
佛語阿難 (大正新脩大藏經一二卷二七二中)

ここに記した以外にも字句の異同箇所はあるが、煩雑さを恐れてこれ以上記さない。宋、元、明の三本と現行の流布本(『真宗聖教全書』I「三經七祖部」興教書院一九四〇、大八木興文堂、一九五七所収)はこの中で①、②、④、⑦、⑨、⑩、⑫、⑬、⑮について憬興『無量寿經連義述文贊』を支持し、また、宋、元、明の三本のみとしては③、⑥、⑧、⑪について憬興『無量寿經連義述文贊』を支持し、流布本のみとしては⑤について憬興『無量寿經連義述文贊』を支持していることが判明した。ただ、⑭については「涅槃」「泥洹」の異同であるが、『無量寿經』の諸テキストはすべて「泥洹」となっている⁽⁷⁾。

これらの対照からすれば、文意が大きくかわるところ、すなわち、異文は見られないのである。この事実は竺法護訳本、伝康僧鎧訳本などという全くの異本ということではなく、字句の異同からしても写本間のよく見られる誤写の異

同であると考えられるのである。したがって、憬興が見た『無量寿經』テキストがまぎれもなく伝康僧鎧訳『無量寿經』であることは明らかであるし、さらに言えば、宋、元、明の三本や流布本の系統のテキストであったことが明らかである。すなわち、渡辺〔一九七八〕、金〔二〇一〇〕の憬興の見た『無量寿經』は竺法護訳であるという説を認める余地はないと言わざるを得ない。したがって、ここでは竺法護訳ではなく、伝康僧鎧訳、仏陀跋陀羅・宝雲共訳の『無量寿經』として扱う事にする。

四、『無量寿經連義述文贊』に引用される『無量寿經論』

憬興『無量寿經連義述文贊』に引用された『無量寿經論』は、浄土の莊嚴を説いた部分として三巻中における中巻に見られるのである。それらを『無量寿經論』テキストと比較対照させて検討を加える。

憬興『無量寿經連義述文贊』では、

・無量徳成故。論云究竟如虛空廣大無邊際故。
(大正新脩大藏經三七卷一五四上)

これに対して、大正新脩大藏經『無量寿經論』本文では、

・量功德成就者偈言究竟如虛空廣大無邊際故。
(大正新脩大藏經二六卷二三一下)

また、親鸞聖人加点本(『無量寿經論註』に引用される『無量寿經論』)では、

・莊嚴量功德成就者偈言究竟如虛空廣大無邊際故。(浄土論註校異下九頁)

となっている。ここで、気付く点は、憬興は、「功德」を「徳」、「成就」を「成」と略して引用し

(7)「涅槃」「泥洹」の字句の異同については、竺法護訳出經典、特に、竺法護訳として確実な『正法華經』などと比較すべきところであるが、見方によっては主観的な相違が生じることもあるので、訳者を決定す

る決め手とはなり得ないのである。香川〔一九九三〕(pp.69～77)は「泥洹」については、仏陀跋陀羅・宝雲共訳の訳語であるとしている。

ていることである。また、親鸞加點本は「量」という字句の前に「莊嚴」の二字が付されているが、憬興『無量寿経連義述文賛』では、「莊嚴」の二字はない。ということは、この点のみで言えば、憬興『無量寿経連義述文賛』は、親鸞加點本を支持していないのである。

また、「量功德」と「無量功德」との相違であるが、「無（无）量功德」を支持している『無量寿経論』テキストは、大蔵経として宋・思溪版、宋・磧砂版、元・杭州版、明・永樂北蔵、明・洪武南蔵、清・龍蔵、石刻本として房山雲居寺（遼刻）、写本として河内長野市真言宗「金剛寺一切経」、稻藺山長福寺「七寺一切経」所収のものがある。それ以外は、「量功德」を支持している。

憬興『無量寿経連義述文賛』では、
・主徳成故。論云正覺阿彌陀法王善住持故。（大正新脩大蔵経三七卷一五五上）
これに対して、大正新脩大蔵経『無量寿経論』本文では、

・主功德成就者偈言正覺阿彌陀法王善住持故。（大正新脩大蔵経二六卷二三一下）
となっており、親鸞加點本では、
・莊嚴主功德成就者偈言正覺阿彌陀法王善住持故。（浄土論註校異下一六頁）
とある。ここでも先ほどの〈量功德〉と同様に、「功德」を「徳」、「成就」を「成」と略して引用していることである。また、親鸞加點本は「主」という字句の前に「莊嚴」の二字が付されているが、憬興『無量寿経連義述文賛』では、「莊嚴」の二字はない。以下はこれらの特徴は同様であるので、憬興『無量寿経連義述文賛』、高麗再雕版、親鸞加點本の順に記す。

（憬）種種事徳成故。論云備諸珍寶性具足妙莊嚴故。（大正新脩大蔵経三七卷一五五上）
（大）種種事功德成就者偈言備諸珍寶性具足妙

莊嚴故。（大正新脩大蔵経二六卷二三一下）
（親）莊嚴種種事功德成就者偈曰備諸珍寶性具足妙莊嚴故。（浄土論註校異下一〇～一一頁）
ここでも〈量功德〉と同様なことが言える。

（憬）形相徳成故。論云淨光明滿足如鏡日月輪故。（大正新脩大蔵経三七卷一五五上）
（大）形相功德成就者偈言淨光明滿足如鏡日月輪故。（大正新脩大蔵経二六卷二三一下）
（親）莊嚴形相功德成就者偈言淨光明滿足如鏡日月輪故。（浄土論註校異下一〇頁）
ここもまた、〈量功德〉と同様なことが言えよう。

（憬）妙色徳成故。論云無垢光炎熾明淨曜世間故。（大正新脩大蔵経三七卷一五五上）
（大）妙色功德成就者偈言無垢光炎熾明淨曜世間故。（大正新脩大蔵経二六卷二三一下）
（親）莊嚴妙色功德成就者偈言無垢光炎熾明淨曜世間故。（浄土論註校異下一一頁）
ここも〈量功德〉と同様である。

（憬）清淨徳成故。論云觀彼世界相勝過三界道故。（大正新脩大蔵経三七卷一五五上）
（大）清淨功德成就者偈言觀彼世界相勝過三界道故。（大正新脩大蔵経二六卷二三一下）
（親）莊嚴清淨功德成就者偈言觀彼世界相勝過三界道故。（浄土論註校異下九頁）
これも〈量功德〉と同様なことが明らかである。

（憬）莊嚴徳成。（中略）水地空皆莊嚴故。（大正新脩大蔵経三七卷一五五上）
（大）莊嚴功德成就者有三種應知。何等三。一者水二者地三者虛空。（大正新脩大蔵経二六卷二三一下）
（親）莊嚴三種功德成就者有三種事應知。何等三種。一者水二者地三者虛空。（浄土論註校異下一一頁）
ここもまた、〈量功德〉と同様である。

(憬) 無難徳成故。論云永離身心惱受樂常無間故。(大正新脩大藏經三七卷一五五上)

(大) 無諸難功德成就者偈言永離身心惱受樂常無間故。(大正新脩大藏經二六卷二三二上)

(親) 莊嚴無諸難功德成就者偈言永離身心惱受樂常無間故。(浄土論註校異下一七頁)

ここも〈量功德〉と同様である。

(憬) 所求徳満成故。論云衆生所願樂一切能満足故。(大正新脩大藏經三七卷一五五中)

(大) 一切所求功德満足成就者偈言衆生所願樂一切能満足故。(大正新脩大藏經二六卷二三二上)

(親) 莊嚴一切所求満足功德成就者偈言衆生所願樂一切能満足故。(浄土論註校異下一七～一八頁)

ここも〈量功德〉と同様である。さらに付け加えると、憬興は「所求徳満成」と記しているのに対して、『無量寿経論』テキストでは、「所求(功)徳満(足)成(就)」の前に「一切」という字句を付していることである。

(憬) 身莊嚴故。論云相好光一尋色像超群生故。(大正新脩大藏經三七卷一五五下)

(大) 何者身莊嚴偈言相好光一尋色像超群生故。(大正新脩大藏經二六卷二三二上)

(親) 何者莊嚴身業功德成就偈言相好光一尋色像超群生故。(浄土論註校異下二二頁)

ここでは、憬興は「身莊嚴」とし、大正新脩大藏經も同じく「身莊嚴」としている。親鸞加點本のみ「莊嚴身業功德成就」となっており、憬興『無量寿経連義述文賛』に引用される『無量寿経論』は、親鸞加點本を支持していないのである。

「莊嚴身業功德成就」を支持している『無量寿経論』テキストは、大藏經としては大日本統藏經、写本としては、鎌倉光明寺所藏寂恵書写

本、京都常楽寺所藏存覚書写本、流布本としては、『浄土宗全書』、『真宗聖教全書』所収のものが挙げられる。

(憬) 不虛作住持莊嚴故。論云觀佛本願力遇無空過者能令速満足功德大寶海故。(大正新脩大藏經三七卷一五五下)

(大) 何者不虛作住持莊嚴偈言觀佛本願力遇無空過者能令速満足功德大寶海故。(大正新脩大藏經二六卷二三二上)

(親) 何者莊嚴不虛作住持功德成就偈言觀佛本願力遇無空過者能令速満足功德大寶海故。(浄土論註校異下二四頁)

ここは、前述の〈身莊嚴〉と同様なことが言える。

(憬) 往生論名衆莊嚴故。頌云天人不動衆清淨智海生故。(大正新脩大藏經三七卷一五六上)

(大) 何者衆莊嚴偈言天人不動衆清淨智海生故。(大正新脩大藏經二六卷二三二上)

(親) 何者莊嚴大衆功德成就偈言天人不動衆清淨智海生故。(浄土論註校異下二四頁)

ここもまた、〈身莊嚴〉と同様なことが言える。

(憬) 往生論二乗種不生。(大正新脩大藏經三七卷一五六上)

(大) 二乗種不生。(大正新脩大藏經二六卷二三二上)

(親) 二乗種不生。(浄土論註校異下一七頁)

ここでは、字句の異同は見られない。

(憬) 妙聲徳成故。論云梵聲悟深遠微妙聞十方故。(大正新脩大藏經三七卷一五六中)

(大) 妙聲功德成就者偈言梵聲悟深遠微妙聞十方故。(大正新脩大藏經二六卷二三一下)

(親) 莊嚴妙聲功德成就者偈言梵聲悟深遠微妙聞十方故。(浄土論註校異下一五～一六頁)

ここは、〈量功德〉と同様なことが言える。

「語」と「悟」の異同であるが、前者を支持している『無量寿経論』テキストは、大蔵経として、高麗再雕版、中華民国・頻伽大蔵経、中華大蔵経、大日本校訂大蔵経、大正新脩大蔵経、石刻本としては、房山雲居寺（遼刻）である。

（憬）虚空莊嚴故。論云無量寶交絡羅網遍虚空種種鈴鈴響宣吐妙法音故。（大正新脩大蔵経三七卷一五六下）

（大）莊嚴虚空者偈言無量寶交絡羅網遍虚空種種鈴鈴響宣吐妙法音故。（大正新脩大蔵経二六卷二三一下）

（親）莊嚴虚空功德成就者偈言無量寶交絡羅網遍虚空種種鈴鈴響宣吐妙法音故。（浄土論註校異下一三頁）

ここは、憬興は「虚空莊嚴」とし、大正新脩大蔵経は「莊嚴虚空」となっており、その語順が逆になっている。『無量寿経論』諸テキストの中で憬興の『無量寿経連義述文賛』を支持しているテキストは一つもない。

（憬）地莊嚴故。論云宮殿諸樓閣觀十方無礙雜樹異光色宝欄遍圍繞故。（大正新脩大蔵経三七卷一五六下）

（大）莊嚴地者偈言宮殿諸樓閣觀十方無礙雜樹異光色宝欄遍圍繞故。（大正新脩大蔵経二六卷二三一下）

（親）莊嚴地功德成就者偈言宮殿諸樓閣觀十方無礙雜樹異光色宝欄遍圍繞故。（浄土論註校異下一三頁）

ここも「虚空莊嚴」と同様である。

（憬）水莊嚴故。論云寶華千萬種彌覆池流泉微風動華葉交錯光亂轉故。（大正新脩大蔵経三七卷一五七上）

（大）莊嚴水者偈言寶華千萬種彌覆池流泉微風動華葉交錯光亂轉故。（大正新脩大蔵経二六卷二三一下）

（親）莊嚴水功德成就者偈言寶花千萬種彌覆池流泉微風動華葉交錯光亂轉故。（浄土論註校異下一二頁）

ここも「虚空莊嚴」と同様である。

（憬）宮莊嚴故。論云如來微妙聲梵響聞十方故。（大正新脩大蔵経三七卷一五八上）

（大）何者口莊嚴偈言如來微妙聲梵響聞十方故。（大正新脩大蔵経二六卷二三二上）

（親）何者莊嚴口業功德成就偈言如來微妙聲梵響聞十方故。（浄土論註校異下二二頁）

憬興の「宮莊嚴」とあるのは、明らかに「口莊嚴」の誤りである。なぜならば、『無量寿経論』諸テキストの中で「宮莊嚴」を支持しているものは一つもなく、その文脈から考えても「宮莊嚴」は決してありえないからである。したがって、憬興が参照した『無量寿経論』テキストが何らかの事情により「宮莊嚴」となっていたか、あるいは、憬興の誤写であろうと推測される。

「莊嚴口業功德成就」を支持している『無量寿経論』テキストは、「莊嚴身業功德成就」と同様である。すなわち、大蔵経としては大日本統蔵経、写本としては、鎌倉光明寺所蔵寂恵書写本、京都常楽寺所蔵存覚書写本、流布本としては、『浄土宗全書』、『真宗聖教全書』所収のものが挙げられる。

五、結論

以上、『無量寿経連義述文賛』に引用される『無量寿経論』を見てきたが、次のことが指摘できよう⁽⁸⁾。

（8）筆者の研究は、書誌学的研究であるので、憬興『無量寿経連義述文賛』の内容に関する研究は、恵谷〔一九七六〕、梯〔一九九二〕、韓〔一九九一〕、金

〔二〇一〇〕、渡辺〔一九七八〕を参照のこと。

①憬興は、『無量寿経論』を引用する際、「功德」「満足」「成就」をそれぞれ「功」「満」「成」と略して引用した。

②憬興が『無量寿経連義述文賛』を著す時に参照した『無量寿経論』は、親鸞加點本をはじめとする流布本よりも藏経本系であることが明らかとなったのである。

※漢訳テキストについては、基本的に大正新脩大藏経のものを使用した。また、親鸞加點本は、『浄土論註校異』を使用した。

参考文献

- ・ 恵谷隆戒『浄土教の新研究』山喜房仏書林、1976
- ・ 大田利生『漢訳五本 梵本藏訳 対照 無量寿経』永田文昌堂、2006
- ・ 大竹晋『新国訳大藏経』釈経論部十八、大蔵出版、2011
- ・ 落合俊典「遊心安楽道の著者」華頂短期大学『研究紀要』第二五号、1980
- ・ 落合俊典「遊心安楽道諸本攷」華頂短期大学『研究紀要』第三三号、1988
- ・ 落合俊典『『遊心安楽道』の諸本について』『仏教論叢』第三三号、1989
- ・ 香川孝雄『無量寿経の諸本対照研究』永田文昌堂、1984
- ・ 香川孝雄『浄土教の成立史的研究』山喜房仏書林、1993
- ・ 梯信暁「憬興『無量寿経連義述文賛』の一考察『印度学仏教学研究』第四一卷第一号、1992
- ・ 梯信暁『インド・中国・日本 浄土教思想史』法蔵館、2012
- ・ 韓普光（泰植）『新羅浄土思想の研究』東方出版、1991
- ・ 金勲アジア研究所研究叢書一〇『元暁佛学思想研究』大阪経済法科大学出版部、2002
- ・ 金亮淳（佐藤 厚訳）「憬興『無量寿経連義述文賛』の思想的特徴 - 引用文献の分析を中心として -」『東アジア仏教研究』第八号、2010
- ・ 櫻部建「阿弥陀経—真実の名のり〈阿弥陀〉—」『浄土仏教の思想』第一巻、講談社、1994
- ・ 章輝玉『『遊心安楽道』考』『南都仏教』第五四号、1985
- ・ 章輝玉「新羅の浄土教」『浄土仏教の思想』第六巻、講談社、1992
- ・ 真宗勸学寮編『浄土論註校異』真宗勸学寮、1925
- ・ 高木昭良『浄土三部経の意識と解説』永田文昌堂、1970
- ・ 高橋審也『『浄土三部経』を読む』角川学芸出版、2010
- ・ 辻本俊郎『『遊心安楽道』の著者について - 『無量寿経論』を手がかりとして』『アジア学科年報』第一号、2007
- ・ 辻本俊郎「元暁『阿弥陀経疏』における『無量寿経論』」『アジア学科年報』第三号、2009
- ・ 辻本俊郎『『無量寿経論』諸本対照』私家版、2011
- ・ 坪井俊映『浄土三部経概説 新訂版』法蔵館、1996
- ・ 中村元、早島鏡正、紀野一義訳注『浄土三部経（上）』岩波文庫、1990
- ・ 福士慈稔『新羅元暁研究』大東出版社、2004
- ・ 藤島達朗、野上俊静『東方年表〈大字版〉』平楽寺書店、1996
- ・ 藤田宏達『原始浄土思想の研究』岩波書店、1970
- ・ 藤田宏達「無量寿経—阿弥陀仏と浄土—」『浄土仏教の思想』第一巻、講談社、1994
- ・ 源弘之「新羅浄土教の特色」金知見、蔡印幻編『新羅仏教研究』山喜房仏書林、1973

- ・ 村地哲明「『遊心安楽道』元暁作説への疑問」
『大谷学報』第三九卷、1959
- ・ 山田行雄「遊心安楽道の浄土思想」『宗学院
論集』復刊第三七号、1965
- ・ 渡辺顕正『新羅・憬興師述文賛の研究』永田
文昌堂、1978